

民族史と現代史のはざまの回想 (2)
～ジゼル・アリミ『フリトゥナ』における再話について

有 田 英 也

1 ある特殊な回想記の叙法

口承文芸研究で再話は、採取した民話を語り手とは異なる第三者が書き直したものを指す。本論では、回想記作者が、すでに語った挿話を、時をおいて再び語ることを再話と呼ぼう。チュニジア生まれのユダヤ系フランス人弁護士・作家ジゼル・アリミの回想記を取りあげて、前述の意味での再話を問題とするのは、次のような理由からである。

アリミは前作『オレンジの樹の乳』(1988)で、自分と父親の物語を民族史と現代史の交錯する場に定位した。その後、今度は自分と母親の物語を『フリトゥナ』(1999)でするにあたって、すでに語った挿話を再び語る必要を感じた。再話であることが脚注で指示されている2箇所のほか、随所に前作との重複が読み取れる。なぜ、再話が必要だったのだろうか？ ひとまず、民族史と現代史の交錯する場に回想録叙述を定位するとはどういうことなのかを、本論前編と一部重複するが、ここで手短かに述べておく。

ジゼル・アリミの二冊の回想記のうち最初の『オレンジの樹の乳』は、語り手の公人としての回想を家族にまつわる思い出で包みこむように書かれている。語り手は父親の病状悪化とともに同書を書き始める。これを前口上として、語り手はまずチュニスのユダヤ人社会の民俗誌的記述を、自身の経験に即して1930年代からほぼ時系列に沿って、父親の死の時点まで行う。最後に置かれたのが、アリミの長男ジャン＝イーヴがパリ弁護士会登録弁護士として宣誓するのを、かつてチュニスの弁護士事務所を使い走りをしていた父親が心待ちにする挿話である。「やったぞ、わしらは赤貧から抜け出たんだ。」「赤貧だなんて、パパ。そうじゃないでしょう。わたし達もうとっくに赤貧でなくなっているのよ」¹⁾。

その後、語りは一転して、アルジェリア戦争初期の裁判闘争（エル・アリア事件）と、そのさなかで発覚した拷問による自白の強要が、ドキュメンタリー風に語られる。本論前編第4節「自我同一性の危機」で述べたように、語られる主題の転換は、語る主体の揺らぎに呼応している。すなわち、フランスの保護国チュニジアで親の反対を押し切って進学し、チュニスとパリで弁護士登録した女性は、フランス文化への憧れ（「いつまでも終わらない恋物語」（Or177））を打ち砕かれ、また裁判中に子どもを預けっぱなしにしていた実の母親からなじられることで、職業人としても母親としても大きく動揺する。

「わたしは新たな統一を探していた。フェミニズムがそれをもたらした」（Or241）。

こうして、語る主体がフェミニストとして新たに定位されると、家族の思い出は脇にやられて、現代史の叙述が始まる。語り手は自身のアルジェ蜂起軍による拘束（1958年5月～6月）、シモーヌ・ド・ボーヴォワールとの出会い、そして不本意な妊娠に悩む女性たちに当時のフランス国内法では非合法の「生むかどうかを選ぶ権利」を要求した「選択(Chosir)」での活動、さらにみずからの再婚について叙述する。この部分の物語は時系列を無視してテーマごとに叙述されるが、多くの挿話は1958年の出来事がきっかけになっている。この点も、新たな主体の確立を裏付ける。前述した民族誌的記述の最終節「わたしのドンキホーテ的闘争」には、アルジェリア戦争史やフランスのフェミニズム運動史に詳しい読者なら、あるいは名を聞いただけでそれと分かるかもしれない一連の裁判事件が、「アルジェリアではジャミラ・ブーパシャ、エル・アリア——社会を相手取った裁判——ボビニーでは人工妊娠中絶の、エックス＝アン＝プロヴァンスでは強姦の裁判」⁽²⁾

と、たんなる列挙にとどめられていた。そのいくつかは『オレンジの樹の乳』後半で詳細に語られる。

このような物語叙法の大きな転回と、主題の入れ子構造の実現を経てはじめて、語り手は自分自身と家族の経験した民族史と現代史の象徴として、1975年11月11日、父親エドゥアールが自宅でレジョン・ドヌール勲章を拝受した光景を語るのである。叙述は時系列に引き戻されている。語り手はその後、この光景を録画したビデオを再生し、読者に自分の叙述が正確であることを、ただしスピーチで使われたいくつかの語句を同義語に置き換えたことを告げる(Or411)。ジスカール・デスタン大統領との昼食会に左翼知識人の一人として招かれた思い出が軽妙かつ辛辣に語られた後、父親の臨終と葬儀が短く語られ、「もうオレンジの樹はない」(Or438)と、チュニジアとの決別を思わせる悼辞が置かれる。オレンジは、祖国チュニジアから鉢植えのようにフランスに移された人々、つまりエドゥアールの世代のチュニジア出身フランス人を象徴する。

父親の晴れがましい一日の記録は、現代史叙述の結論部である。儀式には、国民議会議長エドガー・フォール、やがて社会党から国会議員になるアリミ(1981年、イゼール県選出)にとっては政敵に他ならない首相ジャック・シラク、「選択」の主張のひとつであった人工妊娠中絶法を成立させた保健大臣シモーヌ・ヴェイユが列席しており、語り手の新しい闘いの幕開けを告げる。一方、この儀式は民族史叙述の結論部にもなっている。エドゥアール本人が答礼で「推定1898年生まれ」と述べているように、彼が1924年に、前年末のチュニジア現地人帰化基準の大幅緩和によってフランス国籍を取得したとき、公的機関はまだ現地人の出生記録に注意を払っていなかった。フランス当局はチュニジアのフランス人口を1891年、1896年、1901年に調査し、

これにイタリア人などを加えたヨーロッパ系住民の人口を1906年、1911年に調査しているが、現地人に対する調査はムスリム、ユダヤとも第一次世界大戦前にはなかった⁽³⁾。そのエドゥアールのフランス語の演説が列席者を感激させたことは、植民地における同化政策の成功を意味する。

しかしながら、この儀式は、父親世代のユダヤ人の企図がひととおり収束したことも暗示する。なぜなら、アリミは『オレンジの樹の乳』で、レジオン・ドヌール勲章を欲しがると父親のために奔走するのは志を曲げることだが、癌に侵されて余命いくばくもないのであえてそうしたと告白しているからである。語り手の世代は、父親世代のように素朴に愛国者としての名誉を求めるわけにはゆかず、独立にともなう記憶のせめぎあいを絶えず意識しながら植民地時代を回想しなくてはならない。それは問題を単純化するなら、フランス文化の受容（良き植民地化）とフランス公権力による拷問（悪しき植民地化）とに引き裂かれた記憶と言えよう。アリミの回想記第1作の主題はまさにそれであった。その最終行は、「もうオレンジの樹はない」、つまり植民地は清算された、という含みで結ばれた。

ところが、11年後に発表された『フリトゥナ』でアリミは、前作で語られた物語のいくつかを、民族史と現代史の新しい文脈に置いて語り直さねばならない。エピローグの言葉を信じるなら、回想記第2作は、死亡した母親にみずからの幼年時代の真実について問いかけるといふ、実現不可能な主題を扱っている。死者をして語らしめることができない以上、思い出を探るほかない。このとき、植民地経験があたかも記憶の亡霊のようにアリミに再来する。

「わたしは『オレンジの樹の乳』を、父エドゥアールを継ぐために、死を越えて彼に話しかけるために書いた。思うに、生者の愛は、死者のための本

当の墓なのだ。母の存命中、わたしはあの狂おしい探求を、わたしの傷を、
 欠如を思い起こすまいとしてきた。彼女の死によってわたしは、幼年時代に
 由来し、わたしから去ることのなかったひとつの悪を、外に出すがごとく書
 くよう導かれているのだ。」(傍点引用者)⁴⁾

フリトゥナとはジゼル・アリミの母親の愛称である。病状が悪化するとと
 もに娘に辛くあたる母親に刺激された語り手は、「ひとつの悪」を見据える
 ために、前作の叙述に干渉する。たとえば、語り手は1995年1月23日、母
 親が病院で死去したことを知り、もはや誰にも真偽を問いたせなくなった
 幼年時代の思い出を、内省的に解き明かそうとする。このときかつて語った
 物語がフラッシュバックのように叙述に現れる。

このようにして再現した幼年時代の思い出には、ある特定の時代、地域、
 社会階層に通じる経験の層があるので、アリミはみずからの幼年時代におけ
 る個別と普遍の絡みあいを、ある時は『オレンジの樹の乳』と重複させて、
 またある時は前作を書き直して描き出す。植民地経験はそれとして名指され
 ないが、彼女の幼年時代は植民地にあった。だからこそわたしたち読者も再
 話に注目して、隠れた経験の層を洗い出す必要がある。『フリトゥナ』を手
 にした読者にとって、「オレンジの樹はもうない」という前作の悼辞は、決
 意であって確認ではなかったからである。

2 幼年時代の再話

本論は、再話を3例に即して論じる。そのうち『フリトゥナ』に脚注で前
 作の参照を指示された2例は、次男アンドレの事故死と、語り手の夜尿症を
 治療しに来たベドウインの女性の挿話である。これらはともに幼年時代の衝

撃的な出来事の物語であり、以下に見るように、もともと語り手は母親と自分との現在の関係を問い直すために再話を余儀なくされていた。

もうひとつはラ・カエナ伝説など前作の参照が明示されない一連の挿話だが、これらの多くは幼年時代に家で聞いた物語であって、これまで両親や叔父たちが自分たちの出自を物語化するさいに用いてきたフォークロアである。この種の再話によって語り手は、みずからの文化的アイデンティティを構成する諸要素を再検討する。

語りの文体について言えば、『フリトゥナ』の語り手は、前作『オレンジの樹の乳』が民族史的叙述に1958年前後の現代史的叙述を相互貫入させたのとは異なり、前口上と見なせる第1章の霊安室の場面を除けば、母親の病状悪化を追って、ほぼ時系列に沿って語りを維持する。幼年時代の記憶は、思い出す端からそのつど叙述されてゆく。このような記述は日付を欠いた日記に似ている。事実『フリトゥナ』には、「わたしはある特別な夜のことをずっと覚えている。あまりに特別なので、当時の手帖に書き写しておいたほどだ」(Fr60)、あるいは、「こうした主要な部分を日記から採録した文章を書きながら、わたしは表現が度を越していると気づく」(Fr74)といった、内省的な日記作者を思わせる但し書きがある。第16章「マルセイユの奇跡」の全体を占め、1945年当時の出来事を語る長い回想シーンさえも、同様に日録を思わせる語りの叙法に従っている。

そもそも第16章は、アリミが1994年のヨーロッパ議会選挙に、社会党を離反したジャン＝ピエール・シュヴェヌマン率いる「もうひとつの政治」から立候補したさいの選挙キャンペーンに差し込まれている。母親を看病する傍ら、同年5月24日にマルセイユの国営地方テレビ局で不得意な討論録画をこなした語り手は、「もうひとつの政治」の集會に案内される。そこは郊

外の映画館であり、ひと握りの聴衆を相手にマイクを握ったアリミは、政策より先に思い出を語りだした。

「マルセイユに着いたのは 18 歳の時です。わたしは生まれ故郷チュニジアの書物で習ったフランスを発見しつつありました。そして、サン＝シャルル駅の高い階段から見下ろしたマルセイユは、奇跡のようにわたしに身を委ねたのです。」(Fr162)

語り手は冒頭から植民地経験に言い及んでいる。そして、そこで語られるのは、ドイツ軍占領時代のチュニジアで、家出したままユダヤ人強制移送の憂き目にあった兄マルセルと再会した顛末だった。家から脱出したふたりの兄妹のマルセイユでの再会、それはチュニジアの幼年時代の終わりを告げる挿話である⁹⁾。もちろん母親と直接関係のない内容で、しかも時系列の異なる長文の回想を差しこめば、『フリトゥナ』の主題から逸れてしまうことは語り手も承知している。そこで語り手は、マルセイユでの選挙キャンペーンを第 15 章と第 16 章で語る前に、ひとまず第 14 章末尾で「もうひとつの政治」が得票率わずか 2.54 パーセントの完敗を喫したところまで語り終えてから、さらに続く二章の主題をあらかじめ告げて、物語の時点を前に戻すのである。

「《落ちつくのよ、お前、もう十分だよ。働きづくめだったじゃないか。》わたしは母を安堵させる。《いいから、ママ。まだ当分、始めないから。》わたしは口をつぐんだ。

けれども、あなた方にまずマルセイユでの「もうひとつの政治」について、わたしの人生におけるマルセイユについて語らせてほしい。そして、フリトゥナとわたしの間のマルセイユを。」(Fr152)

こうして『フリトゥナ』における 1994 年ヨーロッパ議会選挙は、『オレン

『ジの樹の乳』では過去の出来事の現代史叙述だったものを、現在進行形で、それも「あなた方」と呼びかけられた読者を送り手として語られる。この呼びかけは弁護士あるいは政治家としてならおそらく自然な言語使用だが⁽⁶⁾、回想記2作ではきわめて例外的である。政治的挫折を蒙ったアリミは、1945年の自分とマルセイユとの出会いを、本国の地を踏んだ若いチュニジア出身者のロマン主義に染めなおして語り終える。「声色が変わる。わたしは戻ったのだ、弁護士に、左翼フェミニストに、候補者リスト第2位に」(Fr179)。眼に見える相手に語る充実した主体として自分を取り戻してから、続く第17章で母親の死を語るのである。

ただし、この手法が『オレンジの樹の乳』ではフェミニズムによる新しい主体の確立を説得的に描きえたとしても、『フリトゥナ』のエピローグで強調された、「幼年時代に由来し、わたしから去ることのなかったひとつの悪を、外に出すがごとく書く」のに不適であることは言うまでもない。そこで再話が悪に下降するためになされる。

3 アンドレの事故死あるいは物語の始まり

アリミは『フリトゥナ』の随所で、この本を書いた動機を述べている。前述のエピローグでは、「わたしたちには両親を失った後で彼らとの関係を書く欲求がおとずれる、と精神分析医たちは言っている。とりわけ母親を亡くした後に、と彼らは明言する」(Fr218)とある。精神分析における「しくじり」⁽⁷⁾が、「失った後で」に読み取れる。生前に確かめておけばよかったのに、知る機会は永遠に失われたからである。だからこそ、「欠如」を埋めるために「書く欲求」がおこる。母親を埋葬した日、「わたしはフリトゥナについて、

告白と告訴状が相半ばする一冊の本を書こう。自我のもっとも深い部分で自分を取り戻さねばならない」(Fr211)と決意したからこそ、「しくじり」の感覚が回想記を貫いている。

まず、『フリトゥナ』の冒頭、霊安室の遺体と対面した語り手は、死後硬直で眼が開いた時に「褪せた灰色」の瞳を見る。生前、母フリトゥナは、小アジア産の黒玉のような「生き生きとした黒」と「鋼の灰色」とのふたつの瞳の色を使い分けていた。前者は他人を魅了する色、後者は「裁可、排除」を意味した。そこから語り手は、母がどちらの色の瞳で自分を見ていたのかと自問する。最初に行き当たったのは、幼年時代の記憶だった。語り手が九歳になるかならぬかの頃、チュニスの暑さを避けて一家は市電で海に出かけた。父エドゥアールによれば庶民が運賃をごまかすのは所得再分配だから当然である。だが、ジゼルを6歳半と言い張る父親の嘘を車掌が見破り、少女を立たせた。それまで他人行儀をしていた母親が、「ついにわたしを見た。それは突然、灰色で冷たくなり、わたしが溺れていた海のような目だった」(Fr15)。衆人環視のもとで立たされた少女は、すでに「凍てつく水」につかっている気分だった。「母はおそらく自分の視線がわたしを傷つけると感じたのだろう。顔を背けて父と車掌の議論を聞くふりをしていた」(Fr15)。結局、車掌は、半額でなく満額を支払わせるだけにとどめ罰金は科さなかった。ふたたび母親は少女を見たが、「いっそう無関心な」目の色をしていた。少女は確信する、この顛末の一切の責任は自分が負わねばならない、と。

すぐに回想は、別の瞳の色に向かう。それは文庫版『フリトゥナ』の表紙に使われている「ベドゥインに扮した乙女の写真」(Fr211)に記録されている(本論口絵, p.48)。語り手は、市電の挿話のすぐ後と、同書最終章の埋葬の挿話との2箇所で、生家の壁に飾られていた同じ写真を、ほぼ同じ言葉遣

いで描写する。「ベドゥインの服をまとい、濃い色の髪を腰までたらし、耳には大きなイヤリング、大きな壺（素焼きということだった）を額にまわした細紐で背にぶら下げている」(Fr15-16)、それが語り手の母であり、「家庭内伝承」(légende familiale)によれば16歳の時、父親を人目惚れさせたのだ。『オレンジの樹の乳』によれば、エドゥアールは「ベドゥイン」だから不釣り合いな結婚だと、母親はこぼしていたらしいが(Or18)、婚約者に見せる写真だったとすれば気の利いたことではある。だが、はたして母は魅力的な黒い瞳で自分を見つめたことがあったのだろうか、と霊安室の語り手は自問する。

この挿話が語られた第1章の末尾で、「しくじり」は「書く欲求」の前段階にとどまっている。「もう見るべきものは何もない」と言う夫を振り切り、「わたしは意地を張り、明日も来るだろう、もう一度フリトゥナと向かい合いたいのだ、それに彼女の目はまだ閉じたばかりだ」(Fr20)と病院の語り手はためらう。母親の目がもう開かないと確信しなければ、愛されなかった理由は知りえないのだと納得できないのだ。しかも、写真の母親はつねに黒い瞳で微笑んでいる。

次の「しくじり」は生前の母親に対する問いかけである。第2章で母親は入院しており、どうやら年齢から死の6～7年前だが、医師から手術不能と宣告されているので語り手は最悪の事態を思い描いていた。「わたしは知りたい。この拒否の理由を理解したいのだ」と焦った彼女は、直接に理由を問いただして、「わたしがお前を愛していないって?」と呆れられ、さらに事実を挙げて詰め寄ったために、「聞いておくれ、もう沢山だ。わたしは疲れているんだ」と問答を打ち切られてしまう。病院の廊下でアリミは汗だくになっていることに気づく。第2章末尾の一文は、「彼女は答えてはくれまい」

(Fr25)である。単純未来は日記形式で書かれた『フリトゥナ』に特有の叙法であって、すでに過去の事態であるものを、まだやり直しの効く未完了の事態として語る。一方、死去したからにはもう母親は「答えてはくれまい」と書くことで、まさに書きつつある語り手が取り返しのつかない事態について抱いている悔恨を表すのである⁽⁸⁾。

その後、病状が悪化した母親に付き添ううちに、語り手は幼くして死んだ弟アンドレの挿話を再話することになる。『オレンジの樹の乳』の語るのは次のような事故である。4歳か5歳のジゼル、6歳のマルセルにはアンドレという、ようやく2歳になる弟がいた。ある日、両親が浜辺に出かけたので、三人は同じ通りに住むゾーラという娘に見張られて遊んでいた。小遣い稼ぎにタイエブ家で手伝いをしていたゾーラは、さっそく台所に入り、丈だかでの柄の長いアルミニウムのアラビア式コーヒー沸かしを取り出し、売れ筋の商品名から *primus* と呼ばれていた石油コンロに掛けて、コーヒーを淹れ始めた。ジゼルは自分にまわりつくアンドレに、「お聞き、もうお仕舞いよ。皆で歩くの。お前は歩き方を覚えるのよ」と寝けるように言った（「その瞬間、わたしは母親だった」）。そして、「おいで、わたしの大きなソファーまで」と声をかけた。この籐の子供用ソファーは市場で父エドゥアールが自分を買ってくれたものである。ジゼルが弟アンドレをソファーに座らせて、部屋で兄マルセルと遊んでいる間、なんとアンドレはソファーを台所まで押して来た。小児はセメント作りのテーブル *dekhana* の陰に隠れて見えなくなった。突然、叫び声が、次いで何か倒れる音と金属音が鳴り響いた。隣家と共用の中庭 *oukala* にいたゾーラが駆けつけた。ソファーの上に立ったアンドレは、コーヒー沸かしに手を伸ばしてつかんだ拍子に床に倒れ、熱湯と火のついた石油コンロが覆いかぶさったのだった。

「この幻覚のような光景はどのように終わったのだろうか。わたしには覚えがない。(中略) 数日後、アンドレは死んだ」(Or33-37)。母親は台所のタイルや玄関の壁を見るのも耐えがたく、一家は転居した。ソファーはおそらくゴミ捨て場送りになった。

『フリトゥナ』には『オレンジの樹の乳』の語る物語が、ほとんど字句を変えずに再録されている(Fr37-44)。このテキストは入念に準備されている。アンドレの死はタイエブ家ではタブーとなったので、アリミは独力で現場を再構成した。前作『オレンジの樹の乳』で、父エドゥアールは死に先立つ数ヶ月前、アリミの記憶力に驚きながら、いくつかの事実を補足したという(Fr39)。『フリトゥナ』には、およそ十年前に事件の正確な日付を母親に訊ねたとあり、おそらく前作の執筆に役立てようとしたのであろう。だが、フリトゥナは、「なんて質問だい、わたしが覚えているとも思っておいでかね、とんでもない」(Fr44)と返答を拒絶したという。これも「しくじり」の例である。

もうひとつの「しくじり」は、文学テクストを書こうとする配慮が、幼年時代の真実を捻じ曲げることである。テクストに残された dekhara などの地方語は、アリミが前作で、「わたしたちはチュニジアのアラビア語を使っていたが、それは不純な方言で、イタリア語起源の言葉がマルタ語およびヘブライ語とよろしくやっていた」(Or176)と、土地固有の言語を拒絶したと矛盾するようだが、『フリトゥナ』でもほぼ同じ地方語が維持されている。それはひとまず語り手が物語に地方色を添え、語る現在と語られる幼年時代とを効果的に、つまり遠すぎて理解不能にならないよう、また近すぎて月並みにならないように繋ぐためである。パリ郊外の高層住宅でもありえたであろう物語は、これらの言葉とゾーラという娘の名によって、遠い国の昔に定

位されるのである。そうなれば、いかに沈痛であるにもせよ、異国情緒に包まれた物語は無害化され、幼年時代を裏切るカタルシスに転じる。これでは「わたしの傷を、わたしの欠如を」表現しそこなってしまうだろう。

アリミが翻訳不可能な語を幼年時代の回想に散りばめたのは、紀行文学や植民地文学⁹⁾にありがちな読者への配慮ではない。前作には、「大人の言葉が子どもの魂を描くには、万物照応の力によるしかない。本物の思い出は、それと生との間に立ちはだかるものをすべて抹消するはずだ。過ぎ行く人生は思い出を捏造する」(Or39)と、大人の言語に対する不信感が顕わである。それでは幼年時代の記憶の何が残るのか。「目のくらむような幼年の思い——あるいはトラウマ——が大人に残した痕跡、それが本質だ。それに比べると、公証人の作った報告書など釘ほどの値打ちもない。」この痕跡を残すために、アリミは当時の言葉をそのままにして物語を書いたのである。それは「思い出が居座り、日常への無関心さを装い、抗生物質に対してウイルスがそうするように、時に抗して変異する」(Or40)ためである。

ウイルスはアンドレについて語るまいとした母親によって活性化した。アリミが『フリトゥナ』に前作の叙述をほぼそのまま再録したのは、入院中の母親が酸素吸入後の朦朧とした意識で、アンドレの死をまったく違ったように物語ったからである。

「《娘よ、お前も浜にいた。お前は砂でカスバ〔城郭〕を作っていた…お前の小さなバケツ…それをお前は満たそうと海まで向かっていた…》彼女はアンドレがわたしの後を追い、自分は《アンドレ、アンドレ、戻っておいで、すぐに！》と叫んだと断言する。フリトゥナは幻覚の中、海中に迷いこんで息を切らしている。アンドレは戻って来ない。わたしが手にバケツを持って右往左往して、アンドレを巻きこんだのだ。」(Fr36-37)

フリトゥナのモノローグを聞いた隣のベッドの女性は、読んでいた雑誌を取り落として、アリミを見つめた。それはあたかも、意識が混濁してもなお鮮明に想起される愛児の眼前の死に、いまここで母を看病している娘が全責任を負っていると告発するかのようであった。『オレンジの樹の乳』でも、「あれはジゼルのソファァーよ」(Or38)と隣家の女性が言ったことを少女は覚えている。ソファァーはバケツに置き換えられたが、この顛末の一切の責任は、「母がわたしに宣告した判決」である以上、自分が負わねばならない。

このとき、『オレンジの樹の乳』で語られた挿話がさりげなく再話される(Fr44, Or245)。夜泣きのひどいジゼルに添い寝したエドゥアールが、娘にシートを取られて腹を出して眠ったために急性虫垂炎にかかり、深夜に救急車のサイレンが鳴り響いて界限が大騒ぎになった。父親は手術で一命を取りとめたという。この夜の顛末を母親は駆けつけた近所の人々に語って聞かせた。以来、「わたしが物心ついてから、母の死の数日前まで、彼女自身によって繰り返したつぷりと聞かされたものだった」(Fr44)。腹を冷やしたことと虫垂炎の因果関係が科学的にないと抗弁しても空しい。母親の生きるユダヤ系チュニジア人の生活文化には、ユダヤ=アラビア語の諺に曰く、「父親殺しの女は呪われよ、消えてしまえ」というものがあり、アラビア語の古い呪いの言葉には、「生まれしな父親の頭を食べねばならない子は死んでしまえ」というものがある。親に苦勞をかける子どもは育てるに値しない、ということだろう。だが、精神的に負い目を感じた十二歳のジゼルは、「愛されない少女の日記」と名づけた当時の日記に事の次第を書きとめたのである。そして、六十歳を過ぎたアリミは、病院からの帰りしな、少女時代の手帖と同じ、「なぜ母はわたしを愛してくれないのか」という問いをふたたび発しようと決心する。

「その夜、わたしは最近著『失われた晴れ間』[1995年]を紹介する討論会をキャンセルする。わたしは事務所にこもって書く。取りとめのない10ページほどの文章。わたしはフリトゥナのモノローグの木霊をきちんと定着するまでは書くのをやめない。」(Fr47)

もはやフリトゥナ本人に答えさせる機会は永久に逸してしまっている。ジゼル・アリミは「選択」と「もうひとつの政治」の闘争を綴った文章とは異なる書き方で、そのショックから立ち直ろうとする。つまり幼年時代の記憶を母親の語りから取り戻し、愛されていなかったという欠如感を充足する何かを描ききることで、「自我のもっとも深い部分で自分を取り戻す」そうとするのである。このとき、植民地経験が特異なアポリアをアリミに突きつける。

「またこんなことも書きとめた(わたしにはあらゆることが心情あるいは慰めの徴になりうる)、フォルチュネがああ想像の浜辺でわたしをアンドレの傍らに描きながら、《可愛い娘だったよ、お前は、髪をすっかりカールさせてね。近所では金の巻き毛って呼ばれていたものさ》と繰り返していた、と。彼女は少し誇らしげにこう付け加えさせた、《お前はフランス女に似ていたよ》と」(Fr47)。

フランツ・ファノン『黒い皮膚・白い仮面』で、白人になることを夢見る被植民者の精神構造について語った。フリトゥナはスペインを追われたユダヤ人マラーノの末裔だと誇る黒髪の女性なのだが、娘が金髪のフランス女性に似ていると「人々」に言われるのが嬉しいのである。母親が自分に注いだかもしれない愛情は、明らかに植民地主義に汚染されている。

しかも、この植民地主義は界限(タイエブ家はチュニスを転々としたが、ジゼルの生まれたのは郊外のグーレットであり、アルベール・メンミのよう

ないいわゆるゲットー地区ラ・アラ出身者ではない)の人々を味方につけていた。フランス語で on と表現される不特定の「人々」こそ、アリミの幼年時代の記憶において彼女から母親を奪って孤立させる存在だった⁹⁰⁾。市電で不正乗車を咎められた時に、「人々は理解した、母はわたしを愛していない、と」(Fr15)。父親の虫垂炎では、「人々はわたしに言ったものだ、わたしはあやうく父親の死を引き起こしかけた、と」(Fr44)。そして、次節で論じるベドウインの施療師の挿話では、夜尿症に悩むジゼルが、「ごめんなさいママ、どうしてそうなるか分からないの」と嘆いても、「みんな (les gens) が正しいのよ (家族も近親もくフォルチュネの不幸>を知っていた)。お父さんがお前が寢床を濡らした朝に厳しくしていれば、たぶんお前ももっと注意するんだらうけど」(Fr96)と撥ねつけるのだった。幼年時代のアリミは、彼女の人生をあらかじめ意味づける「人々」、つまりはチュニジアのユダヤ系社会の常識と闘った。10歳にして彼女は、女性だけが家で皿洗いをさせられることに無期限ハンガーストライキでもって抵抗し、奨学生として国立高等中学校に進学したいと要求したのである (Fr17, Or15)。それゆえ、1945年にマルセイユに居ることが奇跡のように感じられたのだろう。

だが界限の「人々」から逃れる方法は、学歴による社会上昇とはかぎらない。「人々」の属性に還元できない異質の基層文化を持つこともできる。

4 ベドウインの女

アリミは母親が埋葬された晩に9ページほどノートをつけたが、吊り下げられた棺を思い出せなかった。一方、遺族が順に棺に土をかければこれで儀式は終わると思った「瞬間」、彼女の脳裏をよぎったイメージを記憶してい

る。それは第1章で語られたベドゥイン姿の母親の写真である。「肩をはだけて素焼きの壺を背負い、耳にイヤリングをぶら下げた、裸足の娘。長い髪、黒くて背中まである。輝くような、比類のない微笑み。フリトゥナはめったに微笑まなかった」(Fr211)。ラビに促されて土をかけるまでの短時間に思い描いた母親の映像こそ、その晩、彼女がフリトゥナについて「一冊の本を書こうと決意した」ことと深く関わっている。

おそらく写真館で仮装したのであろう、ベドゥインの女に扮した母親の姿は、たとえテキストにそう指示されていなくても、もうひとつのベドゥインの思い出と結びつく。この挿話も『オレンジの樹の乳』の物語が『フリトゥナ』で再話されているが、前作では「母親の生前だったため、衝撃を与えそうな部分はすべて削ってあった」(Fr98)と但し書きされている。ジゼルは夜尿症に悩んでいた。何人もの医者にも診断させて埒のあかなかったフリトゥナが、ひとりの degghaza (女性の占い師) に相談したところ、 mejnouna (ものに憑かれている) と診断され悪魔祓いの儀式を処方された。かつてジゼルの従姉妹のひとりが経験した儀式である。太鼓の鳴り響く中で、従姉妹は赤いスカーフを両手にして踊り、トランス状態になって口から泡を吹きながら動かなくなった。それが悪夢に見るほどおぞましかったので、ジゼルは頑として儀式を拒み、両親は折れた。だがついにある朝、ひとりのベドゥインの女が現れて、濡れたシーツを掴み取って戸口に向かい、隣家に聞こえるように、「この子は十一にもなってまだおねしょをする、 ahchouma (なんという恥さらし)」と叫んだ。そして、真っ赤な燃えさしを火バサミで掴んで振り回すと、そこで加わった母親とともに少女の両手を押さえ、「お前の両足の間を焼いてやる、尿を出すところだ、もしまだおねしょするなら」と言い渡した。前作の挿話には母親の関与が描かれておらず、また施療の現場は自宅

ではなくベドウインの女が働いていた洗濯屋ということになっている。そして、これも前作で「ベドウインの女は止める。わたしは逃げ出す」とのみ記された挿話の結びで、実際には母親が「日頃とうってかわって優しく、『もしお前がこれからおねしょを続けるなら、どうなるか分かったろう。お前はもう大きいんだからね』」(Fr99)と、泣きじゃくる娘に語りかけたのである。それでも、夜尿症は治らなかった。「思うにその頃初めてわたしは激しく死を欲求した」(Fr100)。

ahchouma という語は、アンドレの挿話でゾーラが悪ふざけをするアリミたち兄妹を叱責するさいに用いられていた。この語は『オレンジの樹の乳』におけるアンドレの死の挿話には見られない。本論前編（第1節 ベルベルとマラーノ）で述べたように、『オレンジの樹の乳』の語り手は「チュニジアのアラビア語」を「不純な方言」として激しく拒否した。他のどのような語にも翻訳できないそのコトバが『フリトゥナ』に描かれた少女に界隈の「人々」から浴びせられ、彼女の罪悪感を増幅させている。そして、いったん母親も恐ろしいベドウインの女と一体化し、それゆえ ahchouma と叫ぶ側に就いた後に、優しさを振りまく見慣れぬ女性に変貌する。

ベドウインの意味するものは悪い面ばかりではない。父エドゥアールの祖先が伝承してきたベルベル人の生活文化は、話し好きな祖父バーバを介して娘に伝えられた。おそらく婚約者のためにベドウインの女に扮して微笑む母親の写真は、このような肯定的なベドウイン像であり、しかも見るものに微笑みかけている。その母親が悪しきベドウインの女と共謀した事実を、アリミは彼女が死んで初めて公にできたのである。

さらに、写真の長い黒髪と水筒代わりの壺には、テキストには明示されない別の女性との連想が働く。

「だが、わたしの好奇心は頑固さで裏打ちされていた。ユダヤ教に改宗したベルベル人の子孫であるエドゥアールの出自に、少しだに分け入ることに成功したのだ。そのため、あの伝説的ヒロイン、ラ・カエナ⁽¹⁹⁾に対する情熱が生まれた。

父方の祖父バーバが、物語の切れ端を話してくれていた。みずから率いる軍団の先頭で馬を駆り、蜜色の髪——アラビア語からの訳だ——を腰まで伸ばした絶世の美女。わたしは彼女をチュニカ〔長上衣〕姿で想像していた。このベルベル人の *pasionaria*〔スペイン内戦時の女性指導者に由来し大義に奉じる雄弁家を意味する〕は、ハッサン率いるアラブ軍をほぼ五年にわたって打ち破った。ラ・カエナはユダヤ人だ、とバーバは主張していた〔『オレンジの樹の乳』ではユダヤ教の巫女とするイブン・ハルドゥーンを引く(Or17)〕。彼女は優れた戦略家として、6世紀〔実際は7世紀〕に焦土作戦を考案し、敵に渡す土地の井戸ごとごとくに毒を入れた。彼女はレゾーレスからビゼルトまで、そしてコンスタンチヌスからガベスまで、軍団指揮官として有無を言わず統治した。敗北が迫ると、息子たちに投降してイスラームに改宗し命ながらえるよう求めた。その最期は歴史家にとってまだ謎である。ある者は、チュニジアのとある井戸の縁石の上で斬首され、その土地の名は<ビル・エル・カエナ>〔カエナの井戸〕だ、と考えた。また、ある者はもっと奇想天外な仮説を立て、幼いわたしの気に入った。若いアラブ人捕虜に惚れこんで、彼の手で敵に引き渡されたというものだ。あるいは、ある快樂の夜の後に、この男に殺害された、とも(Fr192)。

ベドウィンの衣装で矢筒ならぬ細長い壺を背負った黒い瞳の娘、それは伝説の女傑ではないのか。『オレンジの樹の乳』の叙述は細部を除いてほぼ同じだが、『フリトゥナ』では、「小学生時代のわたしは、彼女が包囲戦に耐え

るため円形劇場に巨大な地下壕を作らせたというエル・ジェム遺跡を前にして夢見心地になった」(Or, p.17)という一節が省かれ、ラ・カエナ伝説が幼年時代の自分に果たした治療効果と強壯的役割が弱められている。そして、『オレンジの樹の乳』ではラ・カエナ伝説は夜尿症よりはるか前に、また『フリトゥナ』では施療の挿話のはるか後で、ともに前作と同じく家族のルーツを探りながら参照されている。つまり、伝説と自分の幼年時代の関係は、一見して断ち切られている。だが、そこに無意識の抑制が働いていると仮定するなら、「なんという恥さらし」と罵られる少女が、愛する父から受け継いだベドゥインの血を伝説の女傑に託して夢想したとも考えられる。そして、「恥さらし」「お前の娘は狂っている」と「人々」から指弾されてきたジゼル・アリミは、仮装して微笑む母親のうちに、愛憎半ばするチュニジアの多文化社会を見出したことになる。

Gisèle Halimi Fritna



Ma mère ne m'aimait pas. Ne m'avait
jamais aimée, me disait-je certains
jours. Elle, dont je guettais le sourire
— rare — et toujours adressé aux

POCKET